

しんやの巻

安心問答の巻

目次

安心問答……………
付録……………
辨榮聖者の御生家を訪ふ……………

安心問答

問 宗教に入つては先づ第一に安心を決定せよと承はりぬ。全體安心とは云何のことなるか。

答 安心とは、信仰の目的、主義行法とを確とさめて、それに心を安置して動かさぬことを云ふ。即ち信條が心にしかとさまつたことである。

問 信條とは何なるか。

答 三條あり、一所求、二所歸、三所行、これを決定するを安心と云ふ。

問 所求とは何をか求むべき所なるか。

答 信仰につきて要求する心即ち救を求むる目的である。何の要求もないのに信仰の發る故はない、例へば現世の利益を求むるとかまた未來の往生を求むるとかを云ふ。

問 所歸とは何なる者に歸依信頼すべきか。

答 自己最大の要求を容れて救ひ下さるる神尊を定むるので、即ち全く自分の信頼する所の本尊を確かと定めて信することである。

問 所行とは云何。

答 自己を救ひ下さるる神尊がいかにせば其聖旨に契ふて救ひ下さるか其行法である。また救を受ける方法である。上の三條が確にきまつたのが安心のできた人と云ふ。

問 宗教の信仰に、低級なものと高等なものと階級ありや。

答 大に信仰の階級あり。從來機教相應と申すことあり。機とは人の智識の程度にて低級な人に教が餘り高くては手が届かぬ故に、其教法を手に入れて自分のものと爲ることができぬ。また、高い人に教法が低いと、一心に信奉する心が起らぬ。宗教は一心に生命を賭して信奉せざれば救の實を得ることできぬ。故に機類と教法とが相應しなければ完全に信仰が成立せぬ故に、人に階級ある故に隨て信仰に自から高低のあることである。

問 宗教の階級とは云何。

答 實には數多の階級あり今暫く三階に分ちて明せば一、自然教(現世教)二、超自然教(未來教)三、圓具教(光明主義)の三教である。

問 初め自然教の安心はいかに。

答 自然教は最も低級の信仰にて、其要求するところ現世の肉體の幸福を目的とす。例へば病氣平癒を祈り又は災難を免るゝ爲、或は延命を祈り、又五穀豊稔家内安全等の如き甚しきは投機業の運を祈るような者さへある。夫らは幼稚な信心なので、未來の靈魂の幸福を求むるやうな遠大の希望はもたぬ。

問 自然教は云何なる神を信するや。

答 自然物の中或は日月星宿を神と祭り、また高山には神ありとし、水火風雷も神なりと謂ひ、即ち八百萬の神を立て、其神に向て現在の幸福を請求するのが自然教の神と云ふ。

問 自然教では云何なる行法を用いて神を信するや。

答 此信仰は現在の肉體の幸福を求むるのであるから矢張肉體を苦しめざれば神は助けて下さらぬものと信じ、行水、斷食、跣行等を爲し、又行者が祝詞を捧げ咒文を誦し千卷經を讀み等の種々の行を以て神に祈禱する等の用法とす之を自然教の信條とす。

問 自然教はいかに宣傳して行はるや。

答 自然教は幼稚なる思想の人の弱點、病氣とか又種々の災難等に遇ふ時は、或は行者の媒介を借り又は自から神を祈等を以て信仰を爲す。例へば土地に雜草は自然に繁殖する如くに行はる。高等なる宗教は土地に稻を作るに耕耘培養を要する如くに宗教家がつとめて宣傳せざるときは行はれぬ。自然教の現世祈りの肉體の幸福のみを求めて、人格の核なる心靈を立派にして人間の善き果を結ぶ目的の高等なものでない。雜草のような現世祈と米の果を結ぶやうな未來教とは大いに異つてをる。

問 第二の未來教(超自然教)の信條はいかど。

答 未來教の信仰の目的は現世の幸福を祈る宗教よりは高等である。此の教では現世の幸福を求めず専ら後世の幸福を要求す。謂く現世の運命は先生の宿因である。いかに佛の力として宿業は轉することはできぬ。また假の世の幸福は神の力を仰ぎてまで求むるの是不當である。唯後生の極樂に生れて永劫の幸福をこそ求むべきであると教で、この要求が動機となるを未來主義と云ふ。此教の目的とする所は現世では想像にも及ばぬ程高等の美天國即ち極樂に生れて無上の幸福を享受することにあり。淨土宗眞宗の如きは此の宗教に屬してをる故に此の宗旨では現世祈を大に排斥するさて日本にて一般の民間に行はれてをる信仰は上の二つである。然るに現代の有爲なる士女の要求する所はもつと高等に進んで即ち現在より未來を通じて精神的に肉と共に幸福を求むる即ち三期の宗教である。

問 未來教は云何なる神を信するか。

答 未來教にては現世教の如く日月を神とし、また高山の神また水の神などやまた偶像の神を祈るのとは違ふて、此世界を超えたる天國の神とか、また高遠なる淨土に在ます如來を信じ、其無限の慈悲に救はれるものとす。

問 未來教は何なる行をつとむるか。

答 未來教にて救ひを仰ぐ所の方法は必ずしも一定してをらぬ。若し二者を擧てみれば、眞宗の如きは衆生は罪惡深重にして必定地獄に墮する者なれ共阿彌陀如來はそれを救はんが爲に衆生に代りて苦難を受けて救ひの道を立て給ひしことなれば、我らは只其御本願を信じて如來の眞を信じ得れば其時に救はれしなり。其上は只如來報恩の爲に念佛すべきものであると。我らが爲に佛が願も行も悉く成就し給ひしことなれば衆生には別に願も行も要らぬなりと教へてをる。

問 淨土宗にては彌陀の本願は稱我名號として我名を稱へて我を念する者を助け給ふと信じて専ら只佛名を念じて臨終の夕まで相續すれば佛の來迎に預つて必ず往生を得るとす。

問 未來教は我日本に行はる内何の宗旨がそれなるか。

答 淨土宗眞宗などが此れに屬してをる。故に此宗では現世祈を大に排斥する。

問 第三期の圓具教はいかに安心を立つべきや。

答 圓具教は最も發達したる宗教にて佛教の中の大乗佛教其中の最も進化したる圓滿具徳の教である。之を天臺や華嚴にて圓教と名づけてをる。然るに天臺や華嚴はいかに其教理は立派でも聖道即ち哲學である、理論としては實に至れり盡せり、いかに究むとも之を出つことはできぬ。而して其最も理を盡し事を究めたる教理をして實際に人生を救度する所の宗教として何人でも攝取し救濟せらるゝものは即ち光明主義である。

問 光明主義の信條の中に信仰の要求する處はいか。

答 要求の中に多義を含んでをるけれども之を概括して光明生活と云ふ、即ち人の

生れたまゝの心の生活は動物性を目的として生きんと欲してをる。又人生の眞理を自覺せざるを暗黒生活と名づけ信仰に入て人生の眞意義を自覺し永遠の生命として圓滿の極に向上せんと欲する目的の生活を光明生活と名づく。彌陀の光明を得て眞の信仰生活に入ることである。

問 極樂往生と光明生活とは同一なるか否か。

答 極樂往生と光明生活とは能く其眞意を會得してみれば同一である。極樂は別名を無量光明土と云ふ即ち彌陀の光明の實現したる世界と云ふ意味である。

問 光明生活に現在と未來との關係はいかに。

答 光明生活に二位あり。之を佛在世の修業者に二種の涅槃あり。一を有餘涅槃、一を無餘涅槃とす。前のは釋尊の教の下に能く修行して正に道を證得する時は肉體を有ち乍ら神は涅槃常樂の中に安住することを得。心は永遠の光明中に住してをるけれども身體は寒熱や飢渴の苦が免れぬ。これを有餘涅槃と名づくるのである。次に肉體の命終りて正しく永恆常樂の光明界の實現したる處を無餘涅槃と名づくるのである。夫と同じく光明生活にも、理想の光明界と、實際の光明界の二位ありて、正しく彌陀の光明を得心靈復活して永恆の光明中に生活するものを理想の光明生活と名づけ、而して命終りて正しく無量光明の功德莊嚴の實現したる處を實際の光明生活と名づく。

問 光明生活の多義を含むとはいかに。

答 光明生活の中に多義を含むけれども、二義を以て攝することを得、一に最高福、二に最高徳である。

問 最幸福とはいかに。

答 極樂の梵語を須摩提と云ひ、譯して極樂また最幸福の國とも云ふ。彌陀の光明中に安住するときは現在に於ては、精神的に最幸福を感じらるゝ。此肉體の命終れば實際に最幸福の涅槃常樂を感じらるゝ。

問 いかなるを精神的に最幸福なる。

答 人の世に在りて最幸福とは、身體が健全に財産も豊富に位置も高く、子女も饒くすべての生活を圓滿に完全に爲し得らるゝ者は幸福である。然れ共人の精神には貪瞋痴の煩惱ありて、いかに物質上の満足を得るも精神に於て全く不満を去り、不安を除きて眞實に満足と安穩と平和を以て精神生活を爲し得ることはいかゞとおもふ。或意味に於ては眞の幸福は精神生活に在りと云ふも然らんと思ふ。人は生れたまゝの心にては、不安と不満との感じが免れぬ。若し信仰の光明を得て精神復活して光明の生活に入る時は、精神的に満足を感じられ、眞の幸福を感じらる。即ち肉體を有ち乍ら神は最幸福の極樂に栖おそふと感じらる。眞の精神上の幸福は他人よりは窺はれぬ。人一度彌陀の光明に生れ更る時は、自ら人生の眞意味もこの中に感じられ、人生の眞價値も此に至つて認むることになり、自から我何の幸福を斯光明中の生活に至ると繰返し思ふ毎に自己の靈福を悦びて餘りあるに至らん。即ち是れが精神の最幸福である。

問 光明生活の最高徳とはいかに。

答 人の信仰生活に入る目的は、一方には實に精神的に幸福を感ずると共に、又一方には道徳的に人格を圓滿に向上して至善に到達するを人生の目的とするにあり。之を光明生活の最高徳を目的とす。云ふ。言ひ換れば光明の中に如來の聖旨に合ふ行爲を努めて佛に成ることを目的とす。信仰の目的は一方には永恆常樂の幸福を得ると即ち極樂に生るゝこと、一面は至善圓滿なる人、即ち佛になることである。

問 斯の教ではいかなる神に歸命信賴すべきや。

答 現在未來に通じて絶対圓滿なる尊き神尊、阿彌陀尊を本尊として、歸依信賴して、永遠の救度を仰ぐ。

問 阿彌陀尊とは一切諸佛の中の一佛なりや。

答 否しからず一切諸佛の本地本佛にして、諸佛に超て獨一の尊き神尊に在ります。經

に阿彌陀佛は最尊第一にして諸佛の光明能く及ばざる所なりと示されてをる。

問 其如来は何れの處に在し給ふや。

答 如来何の處にも在さざる處なし、經に彼佛の光明無量にして十方の國を照して障礙する所なし、故に阿彌陀と名づく。彌陀は念する心に應現して救はるなり。

問 念佛に何の意義あるか。

答 三の義あり。一、請求。二、感謝。三、讚歎とである。

問 請求とは何の義ぞ。

答 生れたまゝの人は未だ如来を信せず、闇黒の生活をなしてをる。請求して「如来よ我は心闇く罪惡の凡夫にて必定墮獄の徒なればあなたの慈光の中に我を救度し給へ」と念することである。この請求に救我と度我との二義あり。二、感謝とは、已

に救はれたる上には、精神に無上の幸福を感じて、必定墮獄の罪惡なる我が如来の光明中の生活として戴き現在より永遠の救ひを被むりしは全く如来の恩寵なれば、其感謝が溢れて稱名の聲と洩れ出づるを感謝の稱名と云ふ。

問 感謝は只口に稱名するばかりなるか。又自分の行為にも現はるべきものなるか。

答 救を受けたる即ち光明に満されたる悦の溢れが感謝の聲に現はると共に身の行為にも現はれざるを得ぬ。眞實に如来の慈悲に満さるる時に其慈悲に動かされて働くのは是れ感謝が身に現はるのである。

問 讚歎の稱名とは何なるか。

答 讚歎又嗟とも云ふ。是如来無量不可思議の功德の光明を念する時は、自から其絶對不可思議なる慈光に觸るれば、只々感極まりてアアと、ナムアミダ佛と嗟するの外なきに至る。我等は如来慈悲の光明を離れて救はるゝことはできぬ。慈光に觸れば何とも云ばれぬ靈感が感じらるゝ。此の靈感にうたれる時は、アアと自つと嗟せざるを得ぬ、これを讚歎の稱名と云ふ。

念佛三昧とは如何。

答 念佛三昧とは南無阿彌陀佛と云ふ衆生の一心に自己の總てを如来の中に投歸する時、阿彌陀佛不可思議の光明を以て衆生の心に満たしむ。闇黒なる衆生の心は如来の中に入り、如来の心光は衆生の心中に入り來り闇黒と光明と合する時は闇黒は消えて明輝と成る。念佛三昧は衆生心と佛心と一體となりて、衆生罪惡闇黒の心は如来無量功德の光明に靈化せらるゝことになる。光明生活の事に就きては他章にゆづる。

問 この信仰は新らしき宗教なるか。

答 新らしき宗教なるか。先述べし如く大乘佛教中の圓教なので夫を何人にも實行せしむるやうに傳道するにある。教祖釋尊及び聖善導尊者、法然尊者等の眞精神の信仰に外ならず。

上來安心の要領をのべし此の眞理は實に理論にあらず實行にあり。宗教は人の生命を新らしく生れ更らしむる處に眞意あり。吾人は世の同胞衆に對して唯一の大ミオヤの光明を被むりて新らしく生れ更り眞の同胞たらんことを欲して御勸め申す次第なれば、願くば眞面目に道を求むると云ふよりは寧ろ熱誠に道を修して吾人の言の眞理なることを證知し給はんことを希望するものである。

辨榮聖者の御生家を訪ふ

——此拙稿を辨榮聖者の御靈前に捧ぐ——

山本 幹夫

一 序 言

佛縁薄ふして御生前一度も辨榮聖者に御會ひ申し得ざりし私は、せめて聖者の御姉上せき様の御達者で居られる間に御生家を訪ひ、そして親しくせき様から聖者の御幼少時代を中心に、其他色々詳しく御聞き申したいとの念願をかけて抱いて居たのであつたが、其念願を果し得るの機会を今迄見出し得なかつた。今にして思ひ出せば、未だ私が東大哲學科の學生の時であつた。大正十三年十月下旬、千葉縣下ノ關新田にて、惟本戒淨上人御指導の下に別時ありし際、實に思ひがけなくも私は聖者の御姉上様と御妹様(石井まん様)とに御會ひ申し得たのであつた。然し無論其時は御別時の際でもあらず、唯御食事などの折々に、御二方が他の人人におもらしになる聖者の思ひ出を、側から聞いてゐるのみであつた。

ところで此十月の末から十一月の始めにかけて、約一週間程學校の休みが續くのを利用し、そして御生家訪

二

問のかねての希望を果さんと決心したのであつた。尙直接東京に向はず、新潟及び柏崎を廻つて東京に向ふの旅程を採つた。と云ふのは、人も知る如く新潟の地は前後台はせば九十餘日に亘る聖者の布教の地であり、従つて聖者に御因縁深かりし善導寺吉岡上人及び同御令室様から種々聖者の尊き思ひ出か承り得たいとの願ひが一つ、それから今一つは、聖者御遷化の地柏崎を久しぶりに訪ねてお慕参りをいたし、そして特別の御因縁ある極樂寺籠島上人及び同御令室様に、聖者と御對話と御追憶とな色々御聞かせたいとの願ひがあつたからである。然し今は其等の會話を記すことは他日に譲つて、唯御生家訪問を中心に筆を執りたいと思ふ。十月二十八日の朝山形を立つて、其日の夕方新潟に着し、善導寺様に一泊。二十九日の午後新潟から柏崎に行き、極樂寺様に一泊。三十日の夜柏崎を立つて、三十一日の朝東京に着き、其日の夜千葉縣松戸の光明教會に一泊。教會主岩品氏御宅にて好都合であつた。と云ふのも、實は松戸光明教會に御寄りしたの故、岩品氏から御生家への遺筋を詳しくお聞きしたいが爲めであつたからである。松戸縣は上野驛より常磐線にて東方約四十分。松戸驛より光明教會までは略二、三町。岩品氏の御話に出れば、松戸光明教會は大正八年羽生龜太郎氏が聖者の御言葉に基き、聖者の家を買ひ受けて修繕せられしに始まるとか。聖者傳道の御心の現はれと思へば殊の外尊かりき。

二 松戸より御生家まで

十一月一日の朝愈々御生家を訪ねんと、松戸驛を立つたのは九時二十六分。松戸驛より同じく常磐線にて東南丁度三十分。其間馬橋、北小金、柏等の小驛を経て我孫子驛に着いた。其日晴なりし爲め、馬橋、北小金間にては西北の彼方に富士の雄姿を眺め得、そして北方に更に見ゆるが筑波ならんとは想像したれど、果して然るやほざだかならず、ごゝに聖者の筑波天蓋下の御修業を想念して、追慕の心のいや増すを覺ゆ。我孫子驛に到る頃は既に車中より兩方に手賀沼の西端を見ることが出来た。

無論御生家に到る道は色々あるのではあるが、然し歩行道程の最も少き道を選び採つたが爲めに、我孫子驛にて下車したわけである。(上野驛から我孫子驛までは常磐線にて約一時間十分位)安孫子驛の前には乗合自動車があつたけれど、運轉手の話では手賀村の鷲野谷の方へは利用出来ないと云ふので、歩行するの外はなかつた。後でよく聞けば、途中中途ならぬば、歩行の方が早い場合が多いらしい。又小學校の所までは、自動車でも十分通行し得る程立派な道なのである。我孫子驛は南向き。其前の道路は幅四間、長さ三三三間もあらう。其兩側にはかなり大きな榎の並樹があり、又旅屋、飲食店、小商店等が軒を並べてゐる。其道路の突き當りに八阪神社あり。神社の前にて道は東西に岐る。更に八阪神社の東側を通つて南へ行く細い田舎道がありはするけれども、それに出ることは道が悪い上に、尙解り難いことか。私は八阪神社の所から東に行く道をとつたので、我孫子小學校の所迄は約七、八町の間、幅三間以上もある極めてよい道路を歩むことが出来た。其間普通の人家が道の兩側に在り、唯一つ目立つものは左側に新四國八十八ヶ所第四十三番の六師堂があつたのみであ

一

三

る。
 小學校の所まで来ると道が二つに岐れ、左水戸街道、右成田街道と石柱に記してあつた。ここからは此二つの街道の何れなもとり得ず、人に教へらるゝまゝに細い全くの田舎道を東南の方向に、子之神の大松目當てに行くのであつた。途中は道の左右共に梟。所々小さい樹の木が數十本位宛道の兩側に、或は片側のみに植ゑられてゐたのに気がついた。小學校から五、六町も歩いて、それから程なく子之神の大松に近づく頃、道の右側に三谷別荘あり。庭の松林の間にテニスコートを見て、寧ろ異様に感ずる程の梟中。附近には他に人家は無がつたやうである。三谷別荘から一町も行くとも、まさしく道の左右に大松数本あり。そこに来ると丁度四辻。自分の通つて来た道の外に向三つの道あり。一つは「本町を経て停車場」と標柱に書いてあつたところを見ると、田舎道に慣れぬ人々には、却つて此道に由つて来た方が便利であつたのではないかと、其時漸く気がついたわけである。他の二つは「子之神參道」と「岩井及び箕輪方面」に行く道とである。かれて人から岩井に落く渡船を利用するやうにと教へられてゐたので、其「岩井及び箕輪方面」に行く道をとると、程なく坂を下り、手賀沼の縁に出た。以前に一寸車中から眺めた手賀沼を、今や前面に見渡した時の感じは何とも云へなかつた。

そこから渡船場まで東方約四、五町。沿線には一般に薄が生えてゐた。道と沼との間は梟、道の其反對の側は小山になつてゐて、山には松の樹が多かつた。所々に一軒家の農家がある。やがて左側に四五軒の農家集れる所迄行くと、道の右側に極めてさゝやかな千勝神社があつた。これは水神社である。参拜して其前に立つてゐると、向ふの方で、「早く來給へ」と云ふ聲が聞える。聲の聞えた方を見ると、既に渡船が出やうとして居り、渡船に乗り合す人が、私の來るのを待つてゐるのであつた。急ぎ船に乗ると、又後から一人來て、其人を待つて渡船で岩井の方へ渡つたのである。

此手賀沼は周圍約八里、長さ約三里、幅は約十町。渡船場も此沼全體では十以上もあるやうであるが、岩井に渡る沼幅は狭い方であるが爲めに、多分六、七町しかなかつたやうに思ふ。聖者御生前に幾度となく渡り給ひしを思ふて沼の水を眺めると共に他方に又此沼を渡れば御生家も愈々程近いと思へば、聖者のありし日を偲ぶ心は一入強く、乗り合せた人々にも聖者の事を聞いて見るのであつた。そして其中の一人は阿彌陀經の施本のことなどを話してくれた。

渡船が岩井に着くと、兩側竹藪の坂道がある。其道には石が敷き詰めてあつたが、

其を南へ登ると、間もなく東に曲る道を探り、それから更に東南の方向に梟道を辿つて進んで行つた。其梟に居た百姓連から御生家への道を親切に教へられて、渡船場から約四、五町にして目的の鷺野谷の御生家に達し得た。附近の百姓達の教へ方から推察すると、當主は山崎彦太郎氏なるにも拘はらず、山崎家は今でも「嘉平」として知られてゐるらしく、爲めに後には私自身をして百姓達に、「嘉平さんの家」として尋ねせしむるに到らしめた程である。これは後に述べる山崎家の先祖及び聖者の父の名前に由來するものらしい。

三 山崎家先祖と鷺野谷

時しも秋のことゝて、御生家の可成り廣い前庭全體には蓆の上に粗が乾してあつた。其粗を世話して居られた當主山崎彦太郎氏(註一)の奥様に御挨拶申し上げて、玄關の間に案内せられたのは丁度正午前。それから彦太郎氏と同御母上せき様(聖者の御姉上様)とに引き續いて御話を承ること其夜遅くまで、そして尙其翌日の午前中。其間色々と直接承り得し所を綜合して、左に要述しやうと思ふ。ところで彦太郎氏は現在五十四歳。嘗て部落の區長を八年間も勤められ、尙村會議員をも一期勤められたる程にて山崎家及び鷺野谷の來歴などを御聞きするには好都合であつたけれども、然し何分聖者御出家の時、未だ五歳の小兒であられた關係上、彦太郎氏からは聖者の御幼少時代に關してお聞きする由もなかつた。總じて聖者及び其御兩親などの御事に關する左の記事はすべて聖者の御姉上せき様から直接承れるものである。(註二)

聖者の御生家は千葉縣東葛飾郡手賀村鷺野谷五百六十七番地。天保年間火災ありて隣の分家と共に焼失。(註三)現在の家は聖者の曾祖父の建てられたもの。手賀村全體の戸數は約六百戸。其れの一部宇鷺野谷の戸數は約七十戸。鷺野谷に於ける既成宗派の戸別數から云へば、淨土宗五十餘(聖者の御生家も淨土宗である)、日蓮宗約十、眞言宗六位の割合なれど、其は唯形式上のこと。實は地方一般に無信仰の土地。敢へて宗教的

なるものを擧げれば、六、七十の年寄りになつて初めて空也上人の謂はゞ踊り念佛をする位。されど聖者の御生家のみは此無信仰の土地に於て異彩を放つ唯一の信仰深き家庭であつたのである。私は先づ此山崎家の由來を簡単に記して置き度いと思ふ。

今を去る三百有餘年の昔、寛永年間に足利の落武者と謂はるゝ、六騎鷲野谷に來りて、土地を開拓す。其六騎は小金(先に擧げたる松戸と我孫子との中間の北小金)附近に城を構へたる高城下野守の下臣にて、其六人の下臣は御下命あれば直ちに馬に乗つて仕へたる所から、六騎と呼ばれたらしい。然し主として農業に従事したものと見るべきである。其高城家の元祖は高城下野守胤忠であるが、鷲野谷六騎が直接仕へてゐたのは高城清右衛門貞胤、又は高城清右衛門重胤ではないかと私は思ふ。然し今高城家其物の家系を論述の對象としないで、唯、鷲野谷六騎が高城下野守に仕へてゐたものなることのみを記して置くに止める。

右鷲野谷六騎の諸氏を具體的に擧げれば、染谷、平川、山崎、秋元、高野、大橋等。^(註六) 其中の山崎氏が即ち聖者の先祖である。山崎新兵衛を改めて嘉平と云ふ。以後十數氏を経て今日に到る。私は次に聖者の御両親及び祖父母の御性格をお傳へしたいと思ふ。

(註一) 其當時の風習として最初の子供が家督相続をする關係上、聖者の御兄弟の中では御姉上せき様が家督を相続せられたわけである。現戸主彦太郎氏はせき様の長男なのである。

(註二) 聖者の御姉上せき様は聖者を除く他の兄弟方と共に、普通に手習ひされただけではあるが、然し頭腦極めて明晰にして、現在七十七歳の高齡なるにも拘はらず、記憶の特に明確なること、其他種々の點に於て寧ろ驚歎する程であつた。そして聖者御自身の頭腦の優秀であられしを殊に嚮想したわけである。

(註三) 家系其他を調査するに必要なる書類は其際全部焼失したやうである。

(註四) 山崎家の過去帳に由れば、貞胤氏は寛永六年七月十六日歿。行年六十五歳。

(註五) 山崎家の過去帳に由れば、重胤氏は萬治二年四月四日歿。

(註六) 尙今日に於ても鷲野谷村氏の姓を見るに、其大部分が鷲野谷六騎の姓を傳へてゐる。

(註七) 山崎家の過去帳に由れば、先祖山崎嘉平氏は寛永十二年三月七日歿。

四 聖者の御両親及び祖父母

鷲野谷は一般に農業の土地。山崎家も先祖以來^(註一) 農家。財産にも從來變動なかりし由、現在鷲野谷にて中流以上の農家である。先祖以來の家風としては毎年正月元旦より三日間は精進料理のみ。其を一つ擧げて置く。

聖者の父嘉平氏は文政十二年十月六日聖者の曾父嘉七氏の養女てう様と養子嘉兵衛氏との間に生を受けらる。當時俗に鷲野谷博奕と謂はれる程に博奕盛であつて、分家より來れる其養子嘉兵衛氏も博奕を好みし爲め、眞面目にして家業に熱心なりし父嘉七氏と相容れず、終に離縁せらるゝに到り、幼き一人息子嘉平氏を残して他に行く。其次に養子に入りし政治氏には子供なく、今度は大酒家、そして嘉平氏に對しては残酷であつた。

斯の如く實父は博奕を好みて、爲めに離縁せられ、繼父は酒を好みて自分を虐待すると云つた風な家庭に成人せる嘉平氏は、其を動機として漸次宗教的傾向を持たれるに到り、そして終に嘉平氏三十代の時には既に二女(長女せき様と次女たか様)ありたるにも拘はらず、出家を志し、高野山にでも行かんものと決心されたのであつた。然し祖父^(註四) 山崎嘉平様が、「お前は一人息子の事故、お前が出家すると山崎家が絶えることにならるから、どうか思ひ止まつてくれ、」と切に諭し、そしておしとゞめられたわけである。^(註五) 聖者は此頃生を受けられしならんとの家人の御想像である。

然し嘉平氏の母親は眞面目な人であつて、五重相傳、授戒をも受けられ、今尙御生家に残れる日課念佛定業日記を拜するに、殊には死去前數年間は日課念佛九千遍を殆ど缺かさなかつたやうである。其際用ひられし消し名號の紙も數枚今尙残つてゐる。お體も餘り達者な方ではなかつたから、お念佛を仕事のやうにして居られたとのことである。

さて嘉平氏の性格は自己に對しては嚴格、他人に對しては溫厚。身體は壯健。家業たる農業には精勵。四十歳頃からは日課念佛三千遍を怠らず。毎朝三時起床。家人は五時起床。尙近所の人々の迷惑をも顧慮して、五時頃迄は珠數念佛。それから鐘をた

ゝかる。晩も亦念佛修行を缺かさなかつたやうである。特に毎月十五日丈は六萬遍の日課念佛をなされた。徳川家康は陣中に於てすら六萬遍の日課念佛を缺かさざりことを思へば、毎月一日位出來ざるわけはなしとの御意思である。其日は午前一時に起床され、そして日没頃迄に六萬遍の日課念佛を終られたとか。服装は三山廻りの姿。即ち白衣、白帶、そして頭には白布を巻いて念佛せられた由。鐘を數個も割れる程に御熱心であり、そして鐘の音二部落も遠方に聞えたこと云ふ。此地方では「念佛嘉平」として有名であつたやうである。

嘉平氏は酒も煙草ものまねず、趣味としては菊と茶との二つを主要なるものとして擧げることが出来る。菊花を好まれること一方でなく、遠方迄辨當仕掛けで菊の種類を探し集められる程であつたのである。家の前には菊の花壇があつて、よく世話してゐられたとか。茶をも亦自分で作られ、そして自分も飲み、又他人にも飲ませるを樂しみとせられた由。玉露をも作られたやうである。兎も角念佛と菊と茶とは嘉平氏の三事業であると家人は云つて居られた。

斯の如く嘉平氏は稀に見る念佛者であり、尙且つ讀書も普通と異りて二十五歳の頃より阿彌陀經を讀まれ、又祐天大僧正利益記、幡隨院上人御傳記、其他名僧知識物語などを繙かれた由。そして夜遅くまでカンテラの光の下に讀み且つ書かれてゐられたとか。此點が又聖者の御生活をも如何に特色付けてゐることであらう。又嘉平氏は食事前には常に約七粒の飯粒を取出して「如等鬼人衆我今施汝供七粒遍十方一切鬼人供養」と合掌して稱へられ、そして就床前には必ず、「南無西方極樂阿彌陀如來助け給へ南無阿彌陀佛々々々々」と稱へられた由。漸次老衰の境に入られて、終に明治三十七年十二月二十八日の朝普通の如くに起床せられざりし儘、翌年一月八日迄病床に就かれ、其日の午前三時頃靜かに永眠し給ふ。家人の眼には別に來迎のことなども推想されざりし由。聖者は父上様の死目に御會ひなされ得ず、御葬式の殆んど終つて、讀經も最後の頃御歸着遊ばされたとのこと。斯くて聖者の御父上も亦聖なる一生を送

り給ふのであつた。^(註六)

聖者の御母上なを様は隣村泉の平民古川三郎兵衛の四女であられた。古川家は泉村一流の農家にして、手賀村全體の中でも第三位の豪農である。附近では中城^{ナカジマ}と呼ばれてゐる。恐らく昔城主に仕へてゐたからであらう。

なを様の御性格はまさしく温厚者であられた。家人並びに他人に對しても等しく温厚で、子供に對してさへも決して小言を云はれたり、たゞかれたり、否高い聲を出されたことさへ無かつたやうである。家業に極めて御熱心であり、而も身體が御壯健であつたので、七十歳頃農事に従事せられたらしい。嘉平氏の如く信心も深く、そして五十歳頃迄授戒を受けられてからは、日課念佛三千遍を忘られなかつた。無論婦人のことゝて家事の都合もあり、従つて嘉平氏と同様の修業はなし得ず、されど家業を終へた後毎夜御念佛して阿彌陀經を讀むことを缺かさなかつたやうである。

御母上様は聖者を殊に慕はれ、嘗て御病氣の際も是非會ひ度いと切望された爲め、聖者に御歸宅を乞ふたこともある。^(註七)其時のことである。聖者が涅槃經で以て涅槃像を書いてゐられたのは、當時のアンダンの暗き光の下に、而も御母上様に尊き佛法を説き聞かせられながら、晝となく夜となく書いて居られたとか。そして其側から家人が色々聖者に御話をされても何等差支も無いらしく、家人には夫々返事をしながら書き續けて居られたやうである。^(註八)

平生御健やかなりし御母上様も漸次御老衰遊ばされ、然し大正元年九月十一日迄は普通の如く仕事をされたのであつたが、其後病床に就かれた。嘉平氏の場合と同様に死病なれば、共に醫者を招かず。此際御母上様は聖者に御會ひ申し度いと頻りに望まれるので、聖者に其旨の手紙を出し、更に電報を打つこと屢々、親戚の者よりの電報まで打つて貰はれたのであつたが、聖者終に日割の既に決定せる御巡教の爲めに歸宅し給はず、御巡教地九州より送るに半身の彌陀尊像を以てし、其を我身に代へて枕下に祭り、御念佛を勤めてくれるやうにとの御手紙を彦太郎氏に差出されたのであつた。

斯くて聖者に御會ひするの念願遂に叶はず、大正元年十二月十二日の夜安らかに永眠せられたのである。

(註一) 山崎家は平氏である。

(註二) 山崎家の過去帳に由れば、てう様は明治六年十二月二十二日没。行年六十六歳。

(註三) 山崎家の過去帳に由れば、政治氏は慶應三年八月三十日没。行年六十四歳。

(註四) しん様は嘉七氏の妻。山崎家の過去帳に由れば、明治二年五月九日没。七十九歳。

(註五) 此言葉は我々の如き第三人者から見れば、合理的とは思はれないであらう。と云ふのは既に嘉平氏には二女あるのであるから、其子に養子をとることに由つて、十分家系を續けることが出来るからである。然し私の考へでは、此言葉の意味は文字通りに解すべきではなく、其當時の山崎家の家庭としては嘉平氏が中心人物であつて、嘉平氏なしには山崎家の圓滿なる維持が不可能なるの意味を含めるものであると思ふ。

(註六) 嘉平氏の人格の一端を具體的に窺はしむるものとして、特に常行院なる院號をいたゞかれたる際證書を左に記して置く。

(註七) 其れは聖者印度佛蹟巡拜の數年前であつたこと。

(註八) 此涅槃像は約九尺四方の大畫。以前は東京鈴木湯藥様の所藏。數年前寄贈されて現在は光明會所藏の等。

授 證

醫王寺檀家前月主

山崎嘉平儀

授 常行院

右本人一代本宗ノ正行怠リナク勤

修シ常ニ當山ノ清寧ヲ補佐シ能ク

總代ノ本分ヲ全フセラル依テ其ノ

功勞ヲ賞センカ爲メ茲ニ壹代院號

ヲ授與ス

明治三十八年一月 日

當世代 醫王寺第三十四世

達譽 玄海圓

山崎彦太郎殿

五 聖者の御幼少時代

山崎辨榮聖者は安政六年二月二十日正午頃右の如き尊き御二方を御兩親として誕生遊ばされた。御姉上せき様の御記憶に由れば、御誕生に關して靈夢若くは奇瑞の類は御聞き及びなかりし由。(註一) 聖者は長男にして、御兄弟七人中の第三子であらせられた。(註二)

聖者の幼名は啓之助。御幼少の時より身體

極めて御壯健。何れかと云へば肥えて居られた方であつた。御性格は生來温順、従つて兄弟喧嘩などは全然なされなかつたやうである。強ひて擧げれば、聖者三、四歳の

頃丁度隣家の、同じ年輩の遊び友達庫吉と一時間餘りも遊んでゐると、互ひに遊びに厭きる爲めか、夫々自分の家に歸り、そして庫吉が「啓ヤロー」と云へば、又聖者は玄關の間から「庫ヤロー」と唯口先きで云ひ返されることがあつた位である。然しながらかゝることさへも極めて稀であつた程に、兎も角人に逆ふと云ふが如き傾向は御幼少の頃より全く無かつたのである。

聖者の父嘉平氏を虐待せる大酒家の祖父は御幼少の聖者をよく可愛がり、「子は憎いけれども、孫は可愛い」と云つて居られたとか。そして普通よく見る如く、其祖父も聖者を可愛がるの餘り、己が好む酒を共四、五歳の小兒に時々飲ませるのであつた。然し其も唯小兒の時のことであつて、聖者成人されてからは、勿論酒は一滴も口にされなかつたのである。

聖者既に五、六歳の頃より普通の小兒と如何に異り給ひしかを知るべき一つの例として、次の如きものがある。聖者の御生家の隣りは眞言宗の善龍寺と云ふ寺であつて、

(註三)

廣瀬堅信氏が未だ十六、七歳の時、其寺の當時の住職に仕へて手習ひをしてゐられる

頃、普通の子供は皆外で遊び合つてゐるのに、其頃五、六歳であられた聖者のみは廣瀬氏の手習ひの傍に坐つて、ちつと見てゐられるのが常であつた。小兒にも似合はず、極めておとなしく靜かに自分の手習ひを見守つてゐる聖者に、時々廣瀬氏は蟬取りの袋を作つてやられたり、又人形の繪など畫いてやられたとか。聖者も御幼少の頃、少しは蟬 蜻蛉を取られたこともあるらしいが、其は寧ろ稀であつたやうである。

聖者は既に六、七歳の頃より、書物の中の繪などに色彩りせられるのが非常にお好きであつて、今も尙其中の一部が御生家に残つてゐる。此御性向は九歳頃より手習ひに行かれるにつけて一層明かに現はれ、手習ひの暇々に佛畫を畫いては色彩りしてゐられるのが常であつた。

聖者が未だ手習ひに行かれぬ以前、恐らく七、八歳の頃であつたのであらう。一つの逸話がある。これは後に述べる鰻の逸話と同様、特に述べ立てる必要もないかも知

れないが、然し或は其に由つて聖者の御性格の一端をも窺ひ得るかと思ひ、二つ共記して置く。丁度虫干の時のこととして、先祖傳來の大小も座敷に置いてあつたのを取出して、脇差の方を何の氣なしに他の子供に與へられたのであつた。其事を後に知つた父親は、殊に傳來の脇差のこととして非常に怒り、そして人の寢静まるのを待つて、家の裏の杉林の中の大木に幼き聖者を縛りつけたのであつた。ところで母親は大に心配され、そしてどうか此度は勘忍してやつていたゞき度いとお詫び申して、杉林に行つて見られた所、七、八歳の小兒にも似合はず、別に泣きもしないで、唯縛られた儘黙つて立つてゐられたとか。^(註四)

聖者が手習ひに行き初められたのは九歳の時であつて、初めての師匠は近所の八郎左衛門氏であつたが、其人死去するに及んで、隣家の高橋良平氏に就かれ、其後又隣村泉の長谷川五郎氏を師匠として手習ひされたのであつた。師匠に就いて手習ひされたのは十五歳迄であるが、然し九歳から十五歳迄引き續いてと云ふわけではなくして、師匠の代る度に其間を可成り長く手習ひに行かれなかつたのであるからして、師匠に就かれた時を前後合すれば、恐らく三、四年間に過ぎないであらう。初め習はれたものは云ふ迄もなく當時の風習に従つて、名頭、村名、國盡等の類であつた。然し其頃より既に、如何なる書物を讀むにも、普通の子供の様に聲を出されることは決してなく、唯目讀されるのみであつて、そして又何かを書いて勉強されるのが主なる勉學方法であつたやうである。

前にも述べたやうに、手習ひに行かれても、暇さへあれば、綴ぢた半紙に佛畫を畫いて色彩られるのが常であつたのであるが、今尙聖者の御姉上せき様が御記憶してゐられる一つの具體的實例として次の如きものがある。聖者が多分十一、二歳の頃であられたとか。雲上に佛様が五、六體並んでゐられる所を畫かれ、そして其横に、

何事も昔と今はさかひあり

身をつくしてもたゞのほとけを

と云ふ和歌を書き添へられて、御姉上様に示されたとのことである。今私は此和歌の眞意を解決決定せんとするものではないが、然し聖者が如何に性來宗教的な人であつたかは察するに難くはないであらう。あの著明な事實即ち御生家の裏の杉林の西方に三尊佛を拜見給しふたのは既に十二歳の御時であらせられたとか聞く。然し其事は決して家人に直接話されたのではないのであつて、御出家後他の人におもらしになつたので、間接に家人は初めて聞き及んだのであるとのことである。自己内證を深く藏して、他に容易におもらし給はざる御傾向は此御幼少の頃からであつて、我々の傳へ聞く所は無論聖者の御内證の極く僅少の部分でしかないであらう。然るに右の見佛の一事を以て聖者の御生活上の一轉機と思ひ、或は聖者御出家の根本動機の一つと見なす如きは、實に輕卒の甚しきものと云はなければならぬ。私は聖者の宗教的御性格は眞正の意味に於て生れ付きであり、其限りに於て天才的であると思ふのであつて、普通の信者に於て見るが如く、入信に外的動機を必要とするの類でないことを主張し度い。

(註一) 直接我々が聖者の御兩親に御會ひ申し得ないのであるからして、事の有無は無論御姉上せき様の御記憶だけでは判決し得べくもなからう。

(註二) 聖者の御兄弟中姉二人、弟二人、妹二人である。

(註三) 廣瀬堅信氏は眞言宗叡山派の管長になられし人。廣瀬氏當時の住職に二、三年仕へて後、善龍寺を去る時、未だ將來の希望確定し居らず、爲めに聖者の父嘉平氏に對して、「自分の父親は武士であつたし、それで私も武士にならうかと思ふが、一體何になつたらよいものでありませうか」と問はれた所、嘉平氏其れに答へて曰く、「貴方は親とも姉とも死に別れて唯の一人であるし、尙現代の世では武士も考へ物であるから、それよりも僧侶になられたら如何。親や姉の追善にもなることであるから」と。嘉平氏の其言葉に基いて、廣瀬氏は僧侶になることを志されたりし。廣瀬氏は其後も嘉平氏を親の如くに慕はれたやうである。そして又聖者も御出家後廣瀬氏と御親交ありし由。廣瀬氏は明治三年一月没。

(註四) 御幼少の時より極めて温順な聖者を、なぜ父親が斯様に縛りつけるまでに處罰せられたかは、一寸理解に苦むわけであるが、然し何分先祖傳來の脇差のことでもあるし、又一面父親の嚴格なる性格の爲めでもあるであらう。そして其れと同時に此出來事は、聖者は御幼少の時より、普通の子供に見るが如く泣いて事をすまずと云ふ風な、謂はゞ感情一方に支配され得る御性格ではなくして、他方意志の

強い理性的な御性格なりしを、想像せしめるであらう。然うであつてこそ御出家後の荒修業も成就され得たことであると思ふ。

六 聖者御就業時代

聖者は十五歳の頃より手習ひに通ふを止めて、家人と共に農事に勵まれ、そして人一倍に仕事をなされたのである。例へば米を搗くにも人一日に一俵を搗けば、聖者は二俵をも搗かれ、草取りなどでも、自分の役目を終へた後、更に御姉上様の分をも助けられる程であつて、野良の仕事、手賀沼の藻取りなど、すべて斯様な風であつたのである。^(註一)而も斯かる仕事の間にも讀書を好むこと世の常でなく、野良仕事に出かけられる時にさへ、必ず四書五經の類を懐に入れて行かれ、仕事の途中の休息、或は晝食後の休息などの寸暇をも利用して、一人靜かに讀書してゐられ、そして例へば薪や米を他村へ賣りに行かれても、馬を引きながら常に讀書してゐられた程であつた。

斯様なわけであるからして、無論村の祭禮などの場合、餘興の芝居や角力などを見に行かれると云ふやうなことは唯の一度もなく、農業を終へて歸宅された後は毎夜讀み書きに耽られるのであつた。十六、七歳以後は家人はまさしく聖者の寝られた姿を見たことは一度も無いとか。時々家人が、「早く寝ないか、」と注意せられると、「はい」と答へては、カンテラの光を部屋の隅に持ち行き、そしてやはり讀み書きに耽られるのであつた。家人夜中便所に行かれる時にさへも、大抵聖者は尙勉強に餘念がなかつたやうである。當時の讀まれた書物は四書五經の外に。今尙残つてゐるものは、一例を擧げれば、選擇本願念佛集、祐天大僧正利益記、累解脱物語、幡隨院上人傳、三世の光、釋尊一代記等があり、其他自筆になれるものを見ると諸名僧知識の御傳を御自分で寫されたものがあり、書物の中に色々僧の名を書き、又色彩りなどしてゐられる外に、一入興味を引くのは、自筆で書き寫されたもの、一冊「高僧名識物語り」の末尾に、

明治八 四月廿九日

十七歳 愚者

山崎啓之助

と記してある言葉である。

既に此頃より聖者は米粒に小さく字を書いてゐられたのであつて、懐には常に米粒を所持してゐられたやうである。今一例を擧げれば米粒の真中に不動尊を書き、其周圍に三十六童子を書かれて、下に不動尊と三字書かれたことを、同村の染谷庄兵衛氏が他人から聞き、そんなことはある筈はあるまいと、御生家に來て尋ねたので、聖者の父嘉平氏は其米粒を事實見せられたところ、大に驚いたと云ふ。又米粒はおろか、一つの胡麻粒の真中に天照皇大神宮と書き、其左側に八幡大菩薩右側に春日大明神と書き加へられたことを、染谷忠次氏^(註二)が聖者の御姉上せき様に傳へたので、せき様は家に歸つて、「右のやうな話を聞いたが、そんなことがある筈なからう、」と聞かれたところ、聖者は一言も答へず、唯黙つて座敷から紙の上に其胡麻粒をのせて示されたので、せき様は大きく見えるもので其を見られた結果事實なるを知り、非常に驚かされた^(註三)と話してゐられた。

斯かる御生活の間に漸次御出家の時期も近付いて來るのであるが、今は出家なされるに到る關係を直接述べる前に、鰻の逸話を記して置き度いと思ふ。丁度御出家遊ばされる前年のこと、聖者二十歳の御時であつた。九月十二日は藥師様の御縁日であつて、其連夜即ち十一日の夜のこと、聖者は何時もの夜業を終へられて藥師様へ參詣されたのであつた。ところが御參詣の歸途、其門前の小部屋秋元ひさの店の前を通りかゝると、其店に居合はせた同年輩の不良な若者達に呼び止められ、そして「啓之助、鰻が買つてあるから、鰻飯を食はうぢやないか。お前米を持つて來いよ、」と強要され、元來人に逆ふことのない聖者は、彼等惡者の云ふ儘に、米二升を其小部屋のひさから一寸借りて與へられたのであつた。やがて鰻飯は出來上つたのであるが、鰻の丸煮の

ことゝて、とても臭くて口にするを嫌やがられる聖者に無理やりに一杯食はせたのであつた。ところが實は其鰻は商人のを盗んだのであつたのである。

勿論其丈で話がすめば、大事にならなかつたのであつたが、其惡者達は十月十七日の祭禮の夜に博奕を打ち、其が巡査にわかつて、他の者共は皆甘く逃げたのであつたが、鰻の惡者達丈けが、巡査の待伏を知らないで、博奕の金を拾ひ集めに行つた爲めに捕縛され、終に聞かれないことまで白狀して、鰻の件を詳細に述べたのである。其爲めに、鰻飯を共に食つた聖者も呼び出され、印幡郡白井分署の留置所に取調べを受け、更に同郡木下の警察所に廻され、丁度係員青木氏が出張の爲め、五六日間留置され給ふたのであつた。其間聖者は非常に御心配され、一心不動尊を念じてゐられたとのことである。

愈々青木氏歸任して、嚴しく取調べたけれども、聖者のみは鰻を盗まぬことを飽くまで主張されたのである。ところで他の惡人達は例へば「共同」とか云ふ風な青木氏の言葉の意味が解らない爲めに、何を聞いても「はい」と云つて、恰も聖者と共に鰻を盗んだやうな結果となり、まさに千葉の監獄へ送られんとするの時、山崎家でもとより非常に御心配してゐられること故、宿元の秋元ひさは責任上見舞旁々留置所へ行つたのであつた。ところが秋元ひさは嘗て青木氏の子守であつたことのある關係上「何の爲めに來たのか」と青木氏から特に聞かれたのである。そしてひさは事情を詳しく話したところ漸く青木氏も事の真相を了解し、聖者はもとより、惡人達までも全部許してくれて、辛じて大事には到らずにすんだのであつた。聖者歸宅後父嘉平氏の勧めもあつて、謝恩の意味で成田の不動尊にお参りせられたとのことである。

(註一) 聖者は御幼少より極めて御壯健であつて、青年時代も御同様であり、其故に一日とても病氣の爲め農事を休まれるやうなことは無かつた。そこで家人としては當時の風習に従つて、聖者を近所の知人小川八郎左衛門氏の方へ一時假りに入籍せしめ、以て徴兵を免れせしめられたとのことである。

(註二) その頃聖者には一般に友達は無かつたのであるが、染谷忠次氏は其頃僧侶になりたいとの志望を抱いてゐたのであつたので、性格の上から云つても、自然と聖者に親しくなられたやうである。今尙東京深

川に在住の筈。

(註三) 無論當時普通の青年の中には、染師様など参詣する者は無かつたのであるが、聖者のみは参詣してゐられたのであつた。此染師如來の尊像は慈心僧都の作である。染師堂は醫王寺の寺内にある。山崎家は代々醫王寺の檀家總代であり、又染師堂建立當時非常に盡力されたのである。

七、御出家

平生極めて寡言であらせられた聖者は、御出家の御希望など一度も家人におもらしになつたことは無いとのことである。そして又僧侶になるのかも知れないなど、家人は決して御想像される由も無かつたとのことである。従つて父嘉平氏と共に念佛修行を遊ばされるなど云ふことは御出家前一度も無かつたのであつた。唯寸暇をも惜みそして夜も十分寝もせず、一心讀み書きせらるゝ御生活から推察して、家人の御想像では、啓之助は多分師匠か巡査か役人かになり度いのかも知れないと思はれたのであつた。

無論今迄述べたやうに、農家の普通の若者とは全く異なる御性格、と御生活をして極く幼少の頃から、既に佛書を書いては色彩りせられ、少くとも十二歳の時御見佛遊ばされ、其後も古への聖者の傳記などを夜更くる迄、一心書き寫してゐられたところを想へば、宗教的御性向を認めないわけにはゆかないのであるが、そして出家を以て素志とも考へ考へられるのではあるけれども、多分聖者を養育されし御両親への謝恩の意味でか、一心家業に従事され、そして何れ養子などの話が両親の方から出るのをお待ちしてゐられたのもあらう。そしてまさしく其時期が到來したのであつた。

聖者御出家の御年、即ち二十一歳の御時、頃は四月の初めであつたやうである。一ヶ月の間に四ヶ所(一は戸長、今一は區長、他の二つは農家)からも養子に欲しいとの話があつたので、或日晝食後の休息の時、御姉様は父に代つて、四ヶ所の養子先の希望を傳へ、そして養子に行く意志の有無を問ひ尋ねられたのであつたが、聖者は唯黙した儘で何の答へも與へられず、養子に行かぬの意志全然無きが如き御様子であ

つたのである。そこで更に御姉上様は、「お前は師匠になる積りか。巡査になる積りか。師匠や巡査などになつて、薄給の爲めに生家にも困るの結果、普通よく見るやうに、兄弟達に迷惑をかけるやうなことがあつては困るから、そんな者にならずに、養子に行つた方がよいと思ふがどうか」と聞かれても、相變らず何の答へもせられなかつたのであつた。そこで暇もかゝるし、話も決まらないので、「では野良仕事に出て行くがよい」と云はれたところが、其時聖者は自分も何にかなる」と初めて答へられ、そして最後に、「僧侶になる積りだ」と述べられたのであつた。家人が聖者から出家の御意志を聞かれたのはこれが初めてであつたのである。

そこで右の事情を御姉上様は父嘉平氏に述べられたところ、嘉平氏の云はれるのは、「それでは僧侶にでもなる積りなのであらう。然う云へば、醫王寺の婆さんの話では、嘗て啓之助が僧侶になり度いと婆さんに云つたとか、聞いたことがあつた。自分とても嘗ては出家し度いと思つたこともあるし、又一人出家すれば、一族七代も榮えると云ふ譬もあるのだから、無理に勧めなくてもよい。何れ他所へくれる者だし、本人の望む僧侶になるのもよからうよ」との御意見であつて、父は勿論御出家を聖者の意志に任せられたのであつたが、實は御姉上様が僧侶にはならせ度くないと思はれ、そして少し月日が経てば、或は聖者の志望が變るかも知れないと考へられた爲めに、聖者の御歸宅を待つて御姉上様は、「今急に出て行かれては、父の仕事が困る」と申されたところ、聖者は、「では秋迄待たう」と申されて、以後從來の如く、其年の十一月十八日迄農事に勵まれたのであつた。

其間或時御姉上様は、「僧侶になつても、乞食坊主におちふれたり、或は高橋先生(註一)のやうに、家族の厄介者になるやうなことがあつては困る」と申されたところ、聖者は其時御決心をもらされて、「出家後迷惑をかけるやうなことになつたら、舌を噛み切つても歸つては來ない」と語られたやうである。

愈々十一月(明治十二年)農事も一段落ついて、聖者は十一月十九日に御親族並びに

近所の方々に對して御出家の披露をなされ、そして十一月二十日に醫王寺に於て近村小金の東漸寺の御前岩井大康上人より得度式を受けらる。もとより山崎家としては聖者を當時の醫王寺の住職、辨譽德惠師(註二)に弟子入りせしめられたのであつた、が東漸寺は徳川十八檀林の一つにて、醫王寺は其末寺、而も當時東漸寺は弟子不足でもあつたし、其上醫王寺の方は聖者と共に同村の小川徳乘氏も弟子入りされたので、相談の結果、年長の方の聖者が十一月二十一日には御前と共に東漸寺に行かれ、大康上人に師事せられることになつたのであつた。

(註一) 聖者御幼少時代の師匠の一人なる高橋長平氏のこと。大酒家にして家計困難の爲め家族に迷惑のみかけられし人である。これを見せつけられた御姉上様は、それから想像して特に聖者の將來が案じられたのであつた。

(註二) 聖者の御弟子入りに關しての醫王寺住職の靈夢(剃刀の御夢)は世に傳へ聞くところではあるが、然し聖者の御姉上様などは御存知ないとの御話であつた。

八、醫王寺

聖者假令僅か一日とは云へ、兎も角最初弟子入りされたる醫王寺は、御生家より約二町の東方に在り、其道中兩側は農家である。寺の門には左の柱に、「毎月六日教會當日」と記してあつた。勿論此場合醫王寺(及び東漸寺)の來歴を述べることは全然避け度いと思ふのではあるが、然しなせ毎月六日が教會當日となつたかの由來だけを簡単に記して置き度いと思ふ。其は開山上人の御命日に基くのである。

醫王寺開山經譽上人は信州筑摩郡洗馬郷人。徳者にして四ヶ寺をも建立せられたと言ふ。そして自己の御臨終をも確實に豫知され、愈々六月六日の朝弟子をして、念佛講中の人々の所を廻はらせ、「今日は臨終だから、お寺に來て貰ひ度い」と通知せしめられ、斯くて御念佛しながら御往生遊ばされたと言ふことである。其故を以て其後今日も、毎月六日が教會當日と云ふことになつてゐるのである。それで、門柱に毎月

六日教會當日と記してある其由來が解るであらう。

門を入ると、境内の真中には天きな楓の古木がある。其楓の前には明治二十九年五月授戒連の建立せる釋迦如來轉法輪相の石碑があつた。本堂は南向であつて、古びたそして氣の落付く本堂である。本堂内の左の方には聖者が板に、「還念」と書かれた額(註二)が掲げてあつたのを思ひ出す。

本堂に參拜して後、境内の東側の少し小高い所に在る極めてさ、やかな大師堂と辨天堂とに參拜し、それから更に五六間も石段を登ると藥師堂の境内に出るわけである其境内の西隅には立派な鐘樓があつた。そして本堂の略々東方に當る位置に藥師如來堂があり、其は本堂と同じく南向きであつた。藥師堂の正面の左右には縦の太木があり、尙其他松や椎の太木が空高く聳えてゐた。藥師堂の前の東側には不動尊の小さい御堂があり、又其と並んで南側に、大正五年十一月に普門講中の人々が建てた普門品十萬卷供養塔がある。其供養塔の文字は聖者の御筆であつた。

藥師堂其物は可成り大きなもので、多分七間四方もあるであらうが、然し随分古びて居りそして御堂の周囲の縁を歩くのさへ危険な程であつた。

藥師堂に參拜して直ちに思ひ起すのは、前述せる鰻の逸話であるが、又其と同時に聖者御出家後の藥師堂に於ける御修業のことである。其は明治十九年の頃のことであつた。御生家の近所の子守の婆さんが、朝早くから泣き出す子供を守りする爲めに、藥師堂の附近に行き、そして聖者の修業してゐられることを初めて見つけたのであつた。其婆さんが、「辨榮さんは行をしてゐる、と御姉上様に傳へたので、せき様は野良仕事に行く途中、藥師堂を覗いて見られたところ、まさしく行をしてゐたと話してゐられた。其時は二十一日間斷食不臥の行をなされ、腕には香をたかれたやうである。勿論此行とても、子守の婆さんが偶然見つけたからこそ、御姉上せき様も御存知になり、従つて我々も傳へ聞き得るに到るのであるが、斯様に他人が自然と知るに到る場合の外は、聖者は決して如何なる御修業をも又如何なる御内證をも、容易に他人に

もらされなかつたやうである。我々の普く知れる筑波天蓋下の御修行並びに大康上人の追思別行の百日の不臥念佛、或は印度佛蹟巡拜などのことも、家人でさへ全く御存知なかつたのであつて、唯他人から傳へ聞くに過ぎなかつた程である。其故に僅か我々の傳へ聞いたところ丈で以て、聖者の價値を判定するの戒むべきは云ふまでもない。

それから藥師堂の西側を通つて、北へ十五間でも行くと、開山上人の御墓がある。其途中の東側は島、西側は藪であつた。開山上人の御墓の前を通つて更に東へ十間も行くと、聖者の墓がある。約三間四方の墓地は檜で取巻かれ、そして御墓の前の左右にはハルビヤの花が美しく咲いてゐた。御墓に記してある佛陀禪那辨榮上人と云ふ文字は智恩院山下管長の書であるとか。唯追慕の念のみ深ふして、感涙の外はなかつた。

(註一) 此額は明治三十年三月山崎徳次郎氏が奉納せるものである。

(註二) 明治二十七年十二月十五日横濱を出發して、印度に向はせられたのである。商船は中等な御利川。一千圓位持參して行かれたやうであるが、印度での宿料などが非常に高く、爲めに三年間程御滞在なされる豫定なりしを、止むなく繰り上げられて、翌年の四月には最早御歸國遊ばされたのであつた。印度では腸を悪くして、大分御困りになられたやうである。

九、御出家以後

明治十二年十一月二十日御出家なされて以後は、數年間も御歸宅遊ばされないことは屢々であつた。御出家當時、或他の人には決心をもらされたところを聞くと、「自分は決して位階を望まず、諸國を巡教して、衆生濟度のみを目的とするのである、と申されたとか。實に其御決心が其儘事實となつて、御一生を貫いたのであつた。然し無論御出家以前の御生家であれば、御姉上せき様が最も詳細に御承知なのであるけれども、御出家されて以後聖者の御動靜に就いては、寧ろ他の人々から傳へ聞かれる丈けであつて、直接の御回想を承るわけにも行かないのである。無論然うではあるけれど

ども、然し特に感激の中に聖者の御苦心を物語られたのは、五香の新寺建立に關してであつた。初め東京田中家の製茶の事務所の如きものであつた屋敷を大康上人が買ひ受けられ、そして説教所として代理の者を置かれたのであつたが、大康上人の歿後は其説教所の維持極めて困難なりしを、獨り聖者が大康上人の意志を繼いで、終に新寺を建立されるに至る迄の御盡力は實に言語を絶したものであつたやうである。然し今は御出家以後に關して多くを語らず、唯次に二、三の實話を記すに止めやうと思ふ。

明治二十一年、御姉上せき様の夫が死去の際死目にも會はず、又看病もしなかつたからと云はれて、御歸宅の際一週間不臥念佛をなされし由。

次に明治二十四年の頃。隣村泉にて開かれたる授戒の導師として、聖者をば泉の世話人石井元助と秋元自衛門との兩氏が松戸へ迎へに行つたのであつた。そして御伴の歸途、東葛飾郡父村藤心フジココロと云ふ所迄來ると、道路に面せる古井戸に向つて、聖者は一心に御十念を授けてゐられるのであつた。此御姿を振り返つて眺めた兩人は、「上人、古井戸を拜んでどうしたのですか、と聞いたところ、聖者は、「此古井戸で殺害された人があるか、と問ひ返されたのであつた。斯様な問を受けた二人の者は嘗てありし事實を次の如く聖者に物語つたのである。實は以前藤心に金子金太郎と云ふ博奕の親方がゐて、子分達と博奕を打ち、そして二人の子分に金を貸してやつたのである。ところで其金を支拂へさうもない二人の子分は、借金を逃れんが爲めに、親方を山中に誘ひ出して殴り殺し、そして道路の傍の井戸迄運んで來て、其中へ投げ込んだのである。ところがもう死んだものと思つた其親方は尙生きてゐて、そして井戸の中から「金を支拂はなくてもよいかから助けてくれ、と頼むので、其子分達は、「未だ生きてゐるのか、と云つて、井戸の上から更に殴りつけて殺して仕舞つたのである、と云ふ過去の事實をありし儘に聖者に物語つた。其を聞かれた聖者は、道理で此井戸から、慘殺されてうかばれぬから、どうか助けて下さい、と頼む血みどろの姿が現はれたのも、尤もであると申されたとか。此事とても無論二人の世話人が特に聖者に聞かなければ、

決して話されるのではなかつたのであつて、「斯様なことなれば屢々あるのではあるが他の人々なら經驗出來ぬ爲めに嘘と思ふので、却つて勿體ないから、決して人には話らないのである、と御姉上せき様に云はれやうである。右の實話に類する今一つの例を次に擧げて置かうと思ふ。

明治四十三年三月二十七日より一週間、醫王寺にて、聖者御指導の下に五重相傳があつた。聖者は此五重相傳を終れて後、更に一週間、御内佛で一人不臥念佛をしてゐられたのであつた。ところで當時鶴養良善と云ふ尼が醫王寺の留守居をしてゐたので、聖者に床に就かれては如何とお勧めしたところ、「實は御内佛に五十位の女が現はれて、どうか助けて下さい、と云ふので、斯様に念佛してゐるわけである、と話されたのであつた。そして秋元ひさ(鰻の逸話の宿元の婆さん)の孫に、「此所では三十位の肥えた女が亡くなつたことはないか、と聞かれたので、其孫は次の如く嘗てありし事實を聖者に物語つたのである。實は今の住職の先代の鹽邊玄海氏の妻が臨終の際、稀に見る苦しみをして、附添の者は手を押へ、足を押へ、又頭をも押へるの始末、斯くて終に死去したのであつた。ところが程なく玄海氏も死去し、残れる二人の子供が親の追善をもしないのである、との事情を聖者に傳へたところ、それでよく理解されたやうであつた。實はその女は二十七歳で亡くなつたのであつたが、肥えてゐた爲めに三十歳位に見えたのであらう。

聖者は古來の多くの諸聖者に見るが如く、一生を獨身で送られたのであつたが、然し弟子達に對しても亦妻帯を勧められなかつた一つの實例を最後に擧げて置き度と思ふ。其は辨良氏(註一)に就いての話である。辨良氏が二十四、五歳の時、父が妻帯を希望し、そして聖者に其事をお願ひしたのであつたが、「佛敎を十分に體得しない中に妻帯してはならない、と答へられたので、終に再び其事を聖者に頼むわけにゆかず。然し聖者の其金言には従ひ得ないで、程なく妻帯されたやうである。

聖者が最後に御歸省遊ばされたのは遷化の御年即ち大正九年の九月のことであつ

た。聖者の御妹様の子供が腦を病んで、そして聖者に御會ひし度いと切望したことは少くとも歸省の一つの理由であつたらしい。其時僅か一晚、隣りの善龍寺で光明會を開かれたのが、御郷里に於ける聖者御指導の光明會の最初にして最後であつたのである。無論餘程以前に阿彌陀經を普く施本して、其訓讀を宣傳されたことはあつたのであるが、其際は奉讀會と云ふ名稱であつた。聖者は能ふ限り、先づ他の地方に巡教し極く晩年になつてから、御郷里にも光明主義を宣傳されるお積りであつたことを、御姉上せき様におもらしになつたやうである。

聖者は遷化の後は七年間、毎月三日の晩、山崎家で光明會を開かれてゐられたのであつたが、農業の地のことゝて、光明會を夜開けば、爲めに夜業を妨げると云ふ結果にもなり、其點を御遠慮されて、七年以後では、毎年十二月三日にだけ光明會を開かれるやうである。

斯くて聖者の首唱し給ふ光明主義の信仰は未だ御誕生地にては盛ならず、そして恐らく直ちには弘まらないであらう。然し斯かることは聖者にとつては左程の關心事ではなかつたに違ひない。やがて數百年の後否數千年の後、光明主義が世界宗教史上の最高峯に立つて、すべての人心を教導し、そして社會生活が即ち光明生活を實現する時の來らんことが、聖者の最高の念願であつたのであらう。然し果して其念願が成就され得るであらうか。其れの成ると否とは聖者を繼承するに足る人物の輩出如何に由ることであらう。果して現代に於て、斯かる人物たるの自覺を有し得る聖者の弟子が幾人あるであらうか。私は斯かる後繼者の此世に出現せんことを切に念じて止まない。

(註一) 或一部の人々の間に聖者御自身の仕事として傳はつてゐる誤傳、即ち生れた時ケサガケであつたし、占の結果僧侶にならぬと夭折すると言はれたので、出家されたのであるとの出家理由は實に辨良氏のことなのである。

聖者の御姉上せき様から承り得る限りを承り得た私は、二日の正午前には御生家を去つて、物靜かな雨の中を歸途に就いた。雨降りのことゝて、北方十三里の彼方に聳ゆる筑波をも眺め得ず。轉感慨無量の中に、我孫子驛より松戸に立ち寄り、それから其夜東京に一泊、翌三日の夜東京を立つて、四日の朝山形に歸着した。斯くて御生家訪問の旅を聖者の御命日に終へたのである。

——昭和三年十一月二十八日脱稿——

昭和三年十二月廿八日印刷
同 三十日發行

誌代年七冊壹圓貳拾錢(郵稅共)
年拾貳冊 貳圓(郵稅共)

編輯兼 山崎 辨 成
發行人

東京市小石川區諏訪町五五
印刷人 小林七太郎
電話小石川一四九五

發行所
東京市小石川區水道二ノ四四
ミオヤのひかり社
振替東京六八五一番